

## 第3章 第五次計画について

### 1 基本テーマ



読みたい本が いつも子どものそばにある



本県で育つ子どもたちのそばに、いつでもどこでも「手に取ってみたい」「開いてみたい」「読んでみたい」と思える本がある環境づくりを家庭、地域、学校等の社会全体でつくりあげたいという願いを込めて、本計画を策定します。この願いを実現するために、次の3つを重点課題とします。

### 2 重点課題

#### (1) 人々のつながりを生かした読書活動の推進

- 子どもが発達段階に応じて読書習慣を身に付けていくためには、様々な人が関わり、効果的・継続的に読書活動を支援していくことが重要です。
- 特に、乳幼児期から小学校低学年の時期においては、周りの大人たちの関わりが重要であることから、幼稚園、保育所、認定こども園、学校、公共図書館、図書ボランティア、福祉・医療関係者、民間団体など、あらゆる人々のつながりを生かし、家庭における読書活動を活性化する取組を推進していきます。
- 幼保小のつながりを生かした読書活動や、将来の子育てを意識した中高生による乳幼児への読み聞かせなど、世代を超えた「読書の循環」を生み出す活動を推進します。

#### (2) 子どもの主体的な読書活動の推進

- 小学校、中学校、高等学校と学校段階が上がるにつれて高まる不読率の改善には、乳幼児期からの読書習慣の形成を促すとともに、子どもが読書の楽しさや必要性を実感し、興味・関心を高めて主体的に読書に親しもうとする環境づくりが重要です。
- 学校の教育活動において、子どもの主体的な学びが重視される中、読書においても「興味・関心に合わせた読書経験が多い人ほど、小中高を通した読書量が多い傾向にある」という研究結果が報告されています。
- 学校と地域がつながりながら、子どもが自分たちで読書を楽しむ活動を計画・実践できる場の提供や、興味・関心、探究心に応えることのできる環境を整備し、子どもたちの主体的な読書活動を推進していきます。

#### (3) 多様な子どもの可能性を引き出す読書環境の整備

- 読書は、知識や楽しさを得ることはもとより、子どもの教育や就労を支える重要な活動です。全ての子どもが読書に親しみ、読書を通じて豊かな人生を送ることができるよう働きかけていくことが必要です。
- 障害のある子どもや日本語指導を必要とする子ども、読書を苦手とする子ども、不登校児童生徒など、多様な子どもがいつでも本を手にとることができ、読書の楽しさや喜びを体験できる機会を得られるような読書環境の充実を図ります。
- このような読書環境を提供するためにも、あらゆる場面において積極的にICTの活用を推進していきます。